
月夜に舞う桜

月城琴音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜に舞う桜

【Zコード】

N2107A

【作者名】

月城琴音

【あらすじ】

会社員の潤はまだ恋をしたことがない。そんな彼が恋をしたのは
中学生の泉奈。泉奈の純粋さにひかれてゆく潤。だが…泉奈にとつ
て潤はただの友達…

1・桜の舞う公園で

あれはまだ桜の咲く春だった。その日、俺は夜の公園を散歩していた。
人気のない公園、俺は一人ベンチでたたずんでいた。

「今日も疲れたな~」

溜め息混じりにつぶやいていと、俺の耳に誰かの声が聞こえてきた。

「ミル、おいで、ミル」

声のする方に田をやると、そこには猫を抱き上げる女の子

俺はハッとした。まだ中学生ぐらいの女の子、純粋な笑顔で猫の頭をなでる姿は、まるで天から舞い降りた天使のようだった。

俺がしばらくその子を見つめていると

「こんばんは」

俺の視線に気付いたのか、こちらに微笑む少女

「あっ……こんばんは」
ぎこちない返事、それでも彼女は俺に話しかけてくれる。

「お散歩ですか?」

「は、はい、そ、そうなんです」

またもやぎこちない返事、俺は不意に彼女に拳動

不審と思われていなか不安になつた。

「 そりなんですか？ 私もこの子とよく来るんですよ」

彼女は猫にほづりしながら言つた。

「 ああ、 そりなんだ」

俺は緊張のせいか、 笑顔を引きつらせていた。 すると、 彼女は心配そうに俺の顔を覗き込み

「 大丈夫ですか？ 具合… 悪くないですか？」

「 い、 いえ、 だ、 大丈夫です」

そり言つと、 彼女はニッコリと笑い

「 良かつた、 何もなくて」

ほつとしたような彼女の表情、 その表情を見て、 俺の緊張も次第にほぐれていつた。

少しの沈黙が続き、 ぽんやりとつぶやく彼女

「 夜の桜もきれいですね、 なんか風情があつて」

俺も彼女の視線の先を見る。

「 ほんとだ、 今日は満月だから余計にきれいに見える」

俺たちはしばらく夜桜見物にふけつっていた。

ふと、 彼女が思い出したようにこう言つた。

「 あつ、 もう、 こんな時間だ」

時計を見るとすでに9時を回つていた。

「 じゃあ、 私帰りますね」

「ああ……」

なんか素っ気ない返事をしてしまった。

彼女は猫を抱き、公園を出ようとしていた。

俺がぼんやり見ていると、一ちらへ振り向き

「また会えるといいですね、じゃ、また」

「…また」

手を振る彼女に作つたような笑顔で手を振る俺
何をそんなに緊張しているのだろうか？相手は女
といつても中学生ぐらいだ。

俺とは10歳以上離れてるし、それに…俺には付
き合つてる奴だっている…

俺は家に帰り、一人あれこれと考えていた。
だが…女がいるといつても…好きという気持ちには
ほとんどない。

ただ告られたから付き合つてはいるという感じだ。

…何だろう？この気持ちは…人を好きになるつて
…こんな気持ちなのか？しかし、俺が誰かを好きになるなんて…

2・初恋の予感

次の日も俺はあの公園へ行つた。泉奈の
「また会えるといいですね」
といつ言葉を胸に：

昨日と同じ時間、また猫を連れた彼女が現れた。
彼女は俺を見つけると
「うわあ、また会いましたね」

嬉しそうに笑う彼女に微笑み返す俺

「毎日お散歩してるんですか？」

「いや… 昨日から…」この桜を見た…」

とつたに適当な口実を作つてしまつた。

「へえ、私もなんです。」この公園の桜ってすこしきれいでしょ？だから春になるとお散歩に来るんです」「

少しづつ一人の距離が縮まつてゆく… 俺は今まで
にないような幸せをかみ締めていた。

しばり公園に通り田々が続い

た。そしてあの田がやつて来た。

「もひ… 桜散っちゃいましたね」

悲しげに桜を見つめる泉奈

「もうここには来れないです」

俺はとっさに彼女に尋ねた。

「春しか来れないの？」

彼女は葉桜になつてしまつた木を見つめ

「この子も私も… 桜が好きだから… だから毎年、桜の咲く頃だけ來

るんです

桜の咲く頃だけ……俺は泉奈の寂しげな瞳を見つめていた。

「せっかく潤さんにも会えたのに……」

俺は泉奈と離れたくないといつて思っていつ言った。

「あ、あの、お、俺とお友達になつてください」

ですがに相手は中学生……付き合つてくれとは言え

ない……

少し間を置き、彼女は不思議そうに言った。

「私と潤さんはずっとお友達ですよ」

「……」

俺が沈黙していると、思い付いたような泉奈の一言

「やうだ、交換日記しましょいよ

「交換日記?」

「はい、私は男の人と交換日記するの夢だったんですね

嬉しそうな彼女、それを見て俺の心が癒されてゆく……

そして、俺たちは週に一回、この公園で日記を交換することを約束し、桜の散ってしまったことを後にした。

3・田舎で暮らす田舎へ戻る

一週間後、初めての日記を交換する日が来た。
少し早く着いた俺に手を振る泉奈

「潤や〜ん」

相変わらずの天使のような笑顔

「じゃ、一週間後」

「ああ、またな」

泉奈を見送り、手渡された日記を読んでみた。

潤さんへ
今、これを書いてるのは、潤さんと会った次の日です。今日は天気もよくなつて、気持ちいい日でしたね。

教室の窓から見える青空がすくきれいでした。

潤さんは今何してますか？仕事？かな？
また会えるのを楽しみにしますね。

F r o m 泉奈

たわいもないこと…だけど幸せ…これが恋とこう
ものなのか…

しばらべ互いの近況を報告する

日々が続いた。そして、ある日の日記

今日、一つ年上の男の子に

「付き合つて」

つて言されました。

前から手紙とかもらつてたけど…やつぱり迷つてます。

潤さんなりどうしますか？付き合っていますか？それ

とも…

つて俺はたたの友達…所詮…相手は中学生、俺は自分の気持ちをぐ

つと堪え、こう書いた。

それは泉奈ちゃんしだいだよ。

付き合つも、付き合わないも。

一週間後こんな返事が来た。
やっぱり、断りました。

ありがとうございました。潤さんのおかげで決心がつきました。
俺はほっとした。

彼女にとつて俺はたたの友達…それでも嬉しい。

4・忘れかけていたもの

泉奈と出会つて三ヶ月、真夏の太陽が照りつける毎下がり、俺は会社の同僚に呼び出されていた。

会社の同僚…そう、それが俺の彼女

「最近冷たいわね」

「ううかな…?」

「冷たいのは今に始まつたことじやないけど、最近特に冷たく感じ
る」

それはううだうう、俺には恋愛感情がないんだか

うう…
「あたしのことじやう思ひでてるへ。」

「…好きだよ」

いつも嘘、もつづけていためらいはない。

「ほんとの?」

「いつも言つてみだらう」

少し視線をそらす俺

「なら、どうしてデータしたいって言つても、断つたつするのよ。」
…それは

何も言えない…

「何よ?」

「それは…疲れてるからだよ」

顔を背けてしまつた。

「はあ～

溜め息をつく海里みさと

「いつもかわうね、素っ気ないわね

」…

「じょうがないわね、こんなあなたを好きになってしまったんだから

開き直ったような海里

言えない…あいつが好きだなんて…

「今日の夜…」

不意に彼女が口を開いた。

「今日の夜、会えないかしり？」

「ああ

「6時に会社の前ね

「…ああ

行つてしまつた…俺には海里もいた…泉奈はたため友達…そうそれ以上の何者でもないんだ…

5・もう一人の大切な人

その日の夜、俺は海里とレストランで食事をしていた。

「ねえ、昼間はあんなこと言つたけど、本当は誰か好きな人がいるんじゃないの？」

「…」

俺は動搖し、何も言えなくなつていた。

「違うの？」

「…い…いや…」

まともに顔が見れない…いや見れるはずがない。

「あたし分かつてた、付き合つてつて言つた時から…分かつてた」「…何がだよ？」

少し涙ぐんだような彼女の目、それを見て、余計に動搖してしまつ俺がそこにいた。

「最初から、あなたがあたしなんか、好きじゃなかつたってこと」「そ…それは」

言葉が詰まつてうまく言えない。

「いるんでしょ？好きな人？」

「…あ…ああ、いる…」

俺はもうこれ以上嘘はつけないと思い、正直に打ち明けた。

「初めてだつたんだ、あんな風に人を好きになつたの…」

「…」

海里は目を潤ませ、黙つたまま口を開かない。

「悪かったとは思つてゐる、だけど… 今の俺には泉奈しかいなんだ」

彼女は黙つてこちらを見つめている。

俺もそれ以上は言えなくなり、ただ時間だけが過ぎた。

そして、彼女が口を開いた。

「…あなたが好きになつたんだもん、きっといい人なのね」

「ああ」

海里はどこか寂しげな瞳をしていた。

「どうしたの？」

「それが…相手は中学生なんだ」

彼女か一瞬、何が起きたのか分からぬといふうな顔をした。

「相手は公園で知り合つた中学生なんだ」

「…」

獣を見るような目で俺を見る彼女

「ち、違う、そんな怪しいのとは違う、ただ俺は…彼女の純粋さにほれたんだ」

少し疑つたような海里の視線が、俺の胸に突き刺さる。

「初めてだつたんだ…人を好きになつたの…」

俺はいつの間にか頬を涙でぬらしていた。

それを見て彼女も分かつてくれたのか、優しい目でこう言った。

「…初恋か…」

彼女のどこか遠くを見つめる田、俺の心が締め付けられる。

「…お…お前のことも好きだ…だけど、今の俺にはあいつしかいな
いんだ…」

うつむきと笑顔を浮かべる海里

「たとえ、あなたに好きな人がいても、あたしはずっとあなたを好
きでいる。もし、あなたがあたしを忘れても、あたしはあなたを影
から見守り続ける…」

「…海里」

彼女は優しい笑顔で言った。

「最後に一つだけ…これからもずっと…友達でいたい」

「ああ」

俺は今までにないほど力強い返事をした。

「かんばってね

「がんばるよ」

6・再びあの場所で

俺は海里と別れ、泉奈のことを考える日々を送っていた。

月日は流れ、交換日記も続いていたが、泉奈との距離は一向に縮まらない。

俺はどうしても彼女に会いたくなり、あの公園に呼び出した。

枯れ葉の舞う公園、どこか寂しげだ。

「潤さん、久しぶり」

彼女の弾むような声、それを聞き、俺の顔から自然と笑みが零れる。

たわいもない話が続く。それでも彼女は笑ってくれる。

幸せ……ずっとこんな時間が続いて欲しい…

「今日は楽しかったです。じゃあ、また会いましょうね」「またな

笑顔で泉奈を見送る。だが……伝えられなかつた。
彼女のことと思えば思つほど、苦しくなる。

伝えたい……もし……叶わなくても、嫌われたとしても…

俺は面と向かつて伝えるのが怖くなり、日記に書くことにした。

年が過ぎたね。
桜の舞う公園で、初めて純粋な瞳で猫を抱く君を見て、俺は恋に落ちたんだ。

泉奈ちゃんが俺なんかに興味ないのは分かつてる。
俺と泉奈ちゃんは単なる友達……だけどこの気持ちだけは伝えたかつた。

嫌われるかもしれないけど、もし、この俺でいい

なら、今度の日曜日、朝10時にある公園に来てください。

そして、日曜日、俺はあの公園

にいた。

半分諦めはついていた。振られても仕方ない。

10時を少し過ぎた。やはり彼女は来ない…

諦めていたとはいえ、初めて好きになつた人…や

はり悲しい…

俺の目から涙が零れ落ちる…拭つても、拭つてもあふれる涙

そして、俺の涙が涸れようとした時

「潤さん?」

振り向くと、どこか悲しげな目をした泉奈がいた。

「泉奈ちゃん…どうして泣いてるの?」

彼女は目をこすりながらこう言つた。

「大切な人が泣いてると、私も悲しい」

俺は潤んだ目で、泉奈をじっと見つめた。

「…じゃあ…俺と付き合ってくれるのか?」

「…うん」

俺は嬉しくなり、思わず泉奈を抱いてしまった。
ずっと「うん」と言つていたい…もう一度と放したくない

7・俺の知らない泉奈

あの日から俺たちは、日曜の度に会うようになった。

冬、雪の季節、そして、初めて一人で過ごすクリスマス

何もかもが幸せだった。

年が明けたある日曜の午後

今日はいつもと違う。

「どうした？なんか今日は、顔色が悪いけど」

「うんうん、何でもない」

いつものように笑う泉奈、だが苦しそうに見える。

「体だるいのか？」

「うん…少しね…私体弱いから、ちょっと風邪ひくと、苦しくなるの、でも大丈夫だよ、ふふつ」

一生懸命笑う彼女

しない方が

「大丈…」

ふらつく泉奈

「おい、大丈夫か？」

「…う…」

苦しそうに呼吸する泉奈、思わず俺は、彼女を自分の方に抱き寄せる。

俺は苦しそうな彼女を抱き、病院へ走った。

病院に着くと、すぐに治療が行われた。

廊下の待合で俺は、ただひたすら祈ることしかできなかつた。

しばらくして、一人の女人のが、俺に話しかけて来た。

「潤さんですか？」

「は…はい、そうですが」

「泉奈の母です」

俺は驚いた。

田の前には彼女の母親、また中学生の娘に手を出してと、言われるのではないかと、怖くなつた。

「いつもありがと『ありがとうございます』

あの子、あなたに会うのが楽しいみたいで」

怒られるどうりか、礼を言われている。俺は複雑な気持ちになつた。

「あの子が今まで、元気に過ごせたのも、あなたのおかげなんですよ」

「僕の？」

「そう、あなたがいたから、泉奈は小さい頃から体が弱くて、ずっと家に閉じこもりがちだったの、けど、桜の季節になると、猫を連れて公園へ行くの」

俺は泉奈との初めての会話を思い出していた。

「そして、あなたと知り合ったのね。

嬉しそうに話してた、新しい友達ができるって、あんなに笑ってるの久しぶりに見たわ」

…そんな風には見えなかつた。まさかあいつが：

「本当にありがとうございました」

「いえ、いらっしゃりや、僕も泉奈ちゃんのおかげで、幸せでした」

俺は精一杯の笑顔でそう答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2107a/>

月夜に舞う桜

2010年10月28日05時59分発行